

季刊 オレイチ

vol.2
DEC.2011

Sky has no border,
So does Art, I hope.

特集

「境界線上のアート」

季刊
オレイチ
vol.2
DEC.2011
特集
「境界線上のアート」

ORE GA ICHIBAN

俺が一番のホームページが
リニューアル準備に伴いお引越しします。
<http://orega1ban.jimdo.com/>



文梢のホームページもちゃっかり増えます。
<http://bunsyo.jimdo.com/>



ただ今両HPで2012年版カレンダープレゼント中

僕たちはいつも、あとちょっとが届かない。

鈴木梢最新作

シルバーコレクター

現在、絶賛制作中

俺が一番へのお問い合わせは contact_orega1ban@yahoo.co.jp まで!
(リニューアル準備期間中、メールアドレスもこちらに変更になります)

CONTENTS

巻頭掲載

阿部有希 「境界考」

特別企画

DOGWRENCH 「LIE-FULL」 稽古場レポート
(協力：DOGWRENCH)

インタビュー

鈴木梢 「アメント」

超短編戯曲集

小野寺愛 「わたしのひかり」

鈴木梢 「Hello Hello」

巻末掲載

鈴木撤収 「越えられない壁」

特集 「境界線上のアート」

東京の何処でもいい。個人経営の飲み屋に入る。

トイレの壁には所狭しと催し物のチラシが貼られている。

舞台、コンサート、上映会、展覧会。沢山の人が表現をしている。

本当に、沢山の人が。

それなのに、何故、活性化する事がないのだろう。そう思うのだろう。

巷に溢れる「表現」と、世間で消費されている「アート」の間には圧倒的な「何か」がある。それが両者を断絶している。

僕たちは今その境界線上に立ちながら、どちらに飛び込むのか考えている。

誰しもが考えることならば、なおさら今考えよう。

その先に、自分だけの明日を見据えるのだから。

「境界」について考える。まず、辞書を引く。

境界——物事のさかい。

AというものとBというものを分ける境。これは分かる。でも分からない。「界」とは何か。続けて辞書を引く。

界——一、区切り。境。仕切り。

二、限られた社会や範囲。「社交」「文学」

ここで分かる。「境界」は「増大」や「別離」などと同様、意味が似た漢字を重ねた熟語だったのだ。堺の例もある。界も「さかい」と読むのだ。そして、事物の境界に引かれる線のことを「境界線」という。

境界線。

今回鈴木から寄稿の依頼を受けた際、そのメールの中に気になる一文があった。「今、小劇場周りはすごく難しいというか実生活と離れている気がして(略)、境界線の中にも外にもいない感覚」がある、というものだ。小劇場の現状や演劇については語る言葉を持たないが、後段については思うことがあった。

それはそれとして、ぼんやりした話をする。

今、世界地図を想像する。そこでは陸地と海の境、境界線は誰の目にも明らかだ。一方で、実際の境界、波打ち際を想像するとき、それは寄せては返す波として現れる。切り取られた個々の瞬間を考えればその境に線を引くことができるが、次の瞬間には意味のないものとなる。

マクロな視点からはきれいに切り分けられるように見えるものが、ミクロな視点では揺らいでいて、その境界は確定できない。量子力学のひも理論は、粒子を0次元の点としてではなく、一次元の拡がりを持ったひも(弦)として扱うものとして知られるが、境界線も一次元の線としてではなく、ある一定の拡がりを持った二次元の帯として現れる、ということもできるだろう。波打ち際に立つ人は、陸にいても海にいても言えないが、境界にいたるとは言える。境界の彼岸と此岸はデジタルに切り分けられるのではなく、連続的に推移している。こう考えると、冒頭で引いた「界」の字義は「二」の方ではないかという気もしてくる。

阿部有希 境界考

今、自分が一枚の白い紙の上にいると想像する。紙の上には、自分の他にも適度な間隔を取って人が立っているとすると。その紙の半分を赤く塗った時、自分が立っている場所は次の三つのいずれかになる。すなわち、白か、赤か、その中間か。この時、紙が大きくなればなるほど、自分が中間に境界に立っている確率は低くなる。ただし、これはマクロな視点からの見方であることに注意しなければならない。もっと近づいて見てみれば、白と赤の境では色が揺らいで、滲んで、混じり合い、濃淡のあるピンクの領域を作っているかもしれない。そのピンクの領域は両端にそれぞれ赤と白に接する境を有し、さらに濃い、或いは淡いピンクの領域を押し拡げているかもしれない。そのまま拡がり続けられ、最終的には綺麗なグラデーションを描くだろう。理論的には。現実には、紙の両端にはそれぞれ白原理主義、赤原理主義とも言うべき決して他方とは混じらない勢力があり、それゆえ中間色はマジョリテイにはなり得ない。

もちろんこのような二元論的モデルは、ポストモダン状況が進行した現代にそのまま適用できるものではない。現代をこの紙に映すなら、それは或いは大小に重なり合う水玉模様として表されるのかもしれない。色とりどりの円はそれぞれが一つの小さなコミュニティとなる。大きく見れば【青】というコミュニティは隣接する【黄】というコミュニティと対立するが、その境界では互いに相手を取り込む動きが出て、【緑】という中間領域が形成される。コミュニティの内部では自己保存の方向に強いベクトルが働き、外縁では拡散の方向へ向かう。さらに、【緑】はそれぞれ独立に【青】に、そして【黄】に干渉し、さらには周囲の他色とも関わりを持つていく。そのたびに新たな中間領域が形成され、最終的には灰色に近付いていく。その時点で紙を俯瞰すれば、各所に原色を残しながらも、濃淡のあるグレーが大部分を占めているのではないだろうか。グレーとは中間領域であり、拡張された境界の謂である。

素朴に考えれば、「アート」は、或いは「演劇」は原色の側に属するだろう。グレーの側に立つぼくたちは、拡張された境界線の中に立つぼくたちは、その向こう側にある原色を眩しく眺めながらも、越境することを目指してはいないのかもしれない。だってここにあるから。揺らぐグレーの中には、赤も、青も、黄色も、全部あるから。

そんなことを、考えた。ぼんやり。

11月某日、都内某所にてそれは行われていた。

振動、なんだよ。やっぱり。ものを動かすのは。久しぶりに演劇の稽古を見ている自分はそんな感触を感じていた。我々は一人一人、それぞれのリズムで生活している。それぞれの波を持って生きている。そしてそれはお互いあまり干渉しないように気を使って生活を営んでいる。

直接、自らの振動を他者にぶつける、ということはお互いの波が影響して波長が変化すること。それを毎日毎日人と会うたび繰り返していたら、我々は疲れ切ってしまうだろう。

「波風を立てずに」という言葉もあるが、つまりそういうことではないだろうか。

しかし、何の変化もなければ、人は腐ってしまう。人だけではない。生物は代謝を行うし、潮も流れがなければ淀んでゆく。ただではない。だからこそ、一方で特定の人物であったり、場所、出来事に触れ、自身の波長の変化を起こすことを人は求めるのではないだろうか。

時折、舞台と観客が共鳴し、全体が大きくなる瞬間がある。一体感とか、カタルシスとか相乗効果とかそういった類のものである。それが起ころのは演劇はもちろん、音楽であったりスポーツであったり媒体をあげればきりがない。

そういった場で我々は生きる力を受け取ったように感じる。波長の変化は精神の代謝。感動は魂の代謝であるといえるだろう。

さて、前置きが長くなってしまったが、今回の稽古場、その振動をより感じられるものになっているように思えた。

まず、芝居とライブがセットになっていること。そして方言が使われていること。音は空気の振動である。

音楽は皆様も心を揺さぶられたことが何度かあったのではないだろうか。そして、方言。私は方言のある地方で生活してないので強い自信を持って言えることではないのだが、それを持っている人ならば共通語よりダイレクトに感情、質感、その他諸々を伝えられるものなのではないだろうか。

「波風を立てずに」という言葉もあるが、つまりそういうことではないだろうか。

しかし、何の変化もなければ、人は腐ってしまう。人だけではない。生物は代謝を行うし、潮も流れがなければ淀んでゆく。ただではない。だからこそ、一方で特定の人物であったり、場所、出来事に触れ、自身の波長の変化を起こすことを人は求めるのではないだろうか。

時折、舞台と観客が共鳴し、全体が大きくなる瞬間がある。一体感とか、カタルシスとか相乗効果とかそういった類のものである。それが起ころのは演劇はもちろん、音楽であったりスポーツであったり媒体をあげればきりがない。

そういった場で我々は生きる力を受け取ったように感じる。波長の変化は精神の代謝。感動は魂の代謝であるといえるだろう。

境界線上のアート。それを考える上で、今まさに公演に向け活動を行っている DOGWRENCH の現場に突入。



方言、音楽、ことは、しくせ。彼らありとあらゆる方法で我々の心を震わせに、彼らの魂の振動を我々に届けようと仕掛けてくるのだ。

稽古場では様々な波が、各演者から、脚本の言葉からほとばしり、何度も何度も見ているものを揺さぶってきた。皆一筋縄ではないか強い個性を持ち、独特の波長を発している。しかし、不思議と不快ではないのだ。私はその場に起こされている様々な振動に、身をゆだねていた。だが、まだまだ足りないのだ。もっともっと揺さぶってほしいと強く感じている。

当たり前だ。これは稽古じゃないか。この先彼らは何度も何度も稽古を繰り返し、互いの振動をぶつけ合ってチューニングをし、そして：最高のものを舞台に乗けるために今集まっているのだ。

この日私が受けとったもの。そう、これは可能性だ。大きく揺さぶられた自分がどうなるのか、それはまだわからない。

しかし本番を迎えた彼らが巻き起こすであろう大きな振動を真っ向から受け止め、共振してみたいと期待し始めている自分に少し、ニヤリとしてしまった。

【庭田悠甫】

「稽古はみんな平日働いている為基本土日開催です。場所は公民館が多いですね。まずはやって、すり合わせて、それを繰り返して完成度を上げてゆくやり方です」【鈴木裕】

TIME SCHEDULE

- 18:00 集合、稽古開始
- 18:05 ストレッチ等開始
- 18:25 シーン稽古開始
- 20:00 休憩
- 20:10 シーン稽古再開
- 21:00 通し稽古開始
- 21:30 稽古終了
- 21:40 解散

鈴木梢

「アート」

「アートって、はみ出し者なんですよ。」
模索を続ける鈴木梢のことばに迫った
ロングインタビュー。

文：寿々木総
写真：imoko

境界線上のアート。境界線、そしてアート。一見ただけではなかなかイメージの付きにくいこの言葉に鈴木はどう反応するのか。まずは率直に質問をぶつけてみた。

—今号のテーマは「境界線上のアート」ですが、この言葉を聞いて、何かイメージするものがあるかな？
「そうだね……何か、危機感みたいなものは感じるよね」というと。

「境界線上、って言葉って、というか境界、って、あんまりいいイメージが僕にはなくて。だって世界はボーダレスが善、じゃないですか。善、だと言い過ぎだけど、少なくともそこを目指しているんなものは発展してきたわけですよ。特にアートなんて最初っから境界がないのいいことだと思っていて。多分、境界

—なるほど。

「まあ特に根拠はないんだけど(笑)
あとは、「アート」っていう言葉が言い得て妙だなーと思っただけど、芸術、美術の歴史って、境界線との戦いの歴史でもあると思うんです」

—ふんふん。
「あのね、アカデミズムとか権威に染まってきたからポップアートが生まれた、で、それが行き過ぎたらまた次のが出てきた、型にはまりすぎたらフォロビズムが生まれた、レディ・メイドが生まれたみたいな、前の奴らで作った境界をぶっ壊せ！みたいなものってあると思うんだ。それはきつと、音楽とかモードにおいてもそうだと思うんだけど。
で、今って、ボーダレスにすぎた時代やと思うんですよ。その表れが「アート」っていう言葉やと思うんだけど。

垣根が低いんだ。この言葉って、今。僕はそれが正直すげーやなんだけどさ(苦笑)、歌手のことアーティスト、って言うでしょこの国は。いやミュージシャンって言葉があるじゃないかと。ピカソと彼らと、同じ枠に入れることは僕は出来ないな、って思う。

でもね、ずるいなーって思うのは、アートという言葉その意味で使う人らってさ、ピカソとかモディリアーニって言うんだよ。アーティストとは別枠でさ——彼らは固有のブランドだ、といったような感じかな。「多分そうなんだろね。だからね、これってさ、この国、って言い方はあれだけど、やっぱりそういう、あれもこれもそれもみんなアートでしょ、っていう意識があると思うよ。そこに関しては僕はすごく不満」

っていう言葉っていうのは、そのまま何かと何かを隔ててしまいうんですよね。それって、アートにおいては僕はかなりマイナスというか、言語より先に生まれたものとしてすごく勿体無いなというのはあります。元からボーダレスなもんだからね。むしろ、そこから後から境界が介入したのなら、そこには僕は危機感を抱くな、と。

ただ実際、今なんというか、アートがボーダレスかどうかっていうのは僕はそう思えない所もあるけど——それは矛盾してない？

「いや、してると思うよ。でも、してないとも思う。流通という点において、境界線が存在するんだな、っていうのをここ何年かかけてひどく実感したっていうこと。そこに関してはかなりはつきり境界線がない？ 例えば、境界線だし、それはまあ区別とかふるいとして必要なものだとしても、作り手側がボーダー作る場合も往々にしてあるからね。よく言う、「自己満足」っていう奴、あれって結局、仕切りとしての境界を感じるからお客さんがノレなくて怒るわけじゃないですか。だから境界って、本質的にあっちゃいけないものという意識がある」

—なるほどね……そういう感覚はなかった。

「まあ僕が言葉尻を捉え過ぎなのはあると思うけど、形骸化してるとは思う。例えば、表現者、芸術家、作家、歌手……やっぱり重いよね。書いても発しても、それってすなわちものを作る奴らの背負う重さ、っていうとあれだけど、僕はそういうのはあると思っっている。名乗るのに勇気いるもん(笑)

で、そこまでじゃない、って言うとなあれなんだけど、もう少し気軽なフラットな言葉ないかな、ってなった時にこの「アーティスト」っていう言葉が選択されたんじゃないかな。俺は背負え派だからやっぱり極力使いたくないけど、この言葉って確かに気軽に使えるんですよ。それが世相を反映してるとうか。ただやっぱり大衆とうか社会が求めるのがそこになつたらそれはすごくさみしいことだと思っただけだね」

—うーん……
「便利やと、思う。けど、作り手なんて希少種でいいと僕は思うんですよ。社会不適合の代わりにいろんな方の思いを背負う。そんな気軽にポンポン作り手が出てきたら困る(笑)」

—なるほど……
「なるほどばっかやよ！ 今日(笑)
—いやいや、ごめん(笑) 面白いなーと思っただけ。君のそういうった考え方は独特だよな。」

「そうだろうか(笑) それはわからんけれども。ただね、これは僕が最初に言った「アートは本来ボーダレスなもんだ」っていうのと真つ向から対峙してしまっただけだよ」

「でもね、俺言いながらそうか！ って思ったんだけどね、自分の中で芸術と表現は別なんですよ」

—ほう！
「あのね、表現っていうのは市井生まれやと思うんです。庶民派とうか当たり前に生活の中にあるもの。でもその中で、どうしようもなく別次元のものが生まれてきちゃう。それが芸術であり、アートなんです。多分今、この二つが混同ってか一括りにされてる。そう思うと、自分の中でしっくり来る。アートって、はみ出し者なんです。良くも悪くもきつと。

で、ポップスは市井を向いたものだから、その良さをアートとは評せないよね。むしろ逆のベクトルだから繋げるのがそっちで、はみ出すのがアートなんだろうね」

—おお！ まとまったね。

「まとまったね(笑) まあ結局、孤独であれ孤高であれ、っていう話だよ。ただ、こういう中でアマナリセミプロなりの人がどうすつかというのは、難しいと思う。芸術も表現も割とパッキリ別れているようにいて飽和してるから。トリエンナーレとかも、面白い／つまらない、って評価されてしまっしね。受信法までも同一化しちゃってるんですよ。難しいよ、ほんとに——答えはまだ、見つかっていない。」

—当たり前やがな！(笑)

でも、時代はどうであれ作ることからは人は逃れられない、っていうポジティブな発見はあったから、それはすごく大事にしたいと思う。作ってもいいんだ、っていう時代に生まれたっていうのはでかいよ」

わたしのひかり

小野寺愛

深海のような喫茶店のような舞台の上、
無数のウエイトレスたち（女）と客がいる。

女1 私は人魚。時給850円と引きかえに自分の言葉を使った人魚。

女2 「いらっしやいませ」。

客1 アイスコーヒーをください。

女2 「かしこまりました」。

女3 あなたと出会ってからはじめて、私は呼吸が楽にできました。だから私はあ

なたを想ってアイスコーヒーを作る。正しくはアイスコーヒーを注ぐ。

当店自慢のアイスコーヒー。正しくは隣接するドトールで買って来た、

パック詰めのアイスコーヒー。

客2 すみません。この本日のランチのタイカレーは何が入っているのかしら。

女2 「鯛でございます」。

客2 ああ、そっちなね。・・・、そういえばあなた鯛に似ているわね。

女1 私は人魚。顔が魚、体は人間、心が人魚。私の話すことのできる言葉は

決まっている。

女4 「いらっしやいませ」52回「かしこまりました」102回「ありがとう

うございませ」88回。

女2 「お待たせ致しました、アイスコーヒーでございます」。

客1 ありがとう。

女5 そして12回アイスコーヒーを注ぎ9回旬のメニューを勧め16回おつ

りを渡す。23回テーブルを拭き1回グラスを割って5回ナポリタンを

運ぶ。7回時計を見ては勤務時間が終わるのを願ひそのせいで6回ガム

シロップを溢し今月3回目の来店となる老夫婦に憧れる。あと何回アイ

スコーパーを注げばあなたは私の名前を呼んでくれるだろう。あと何回

アイスコーヒーを運べばあなたは私に触れてくれるだろう。あと何回、

暗転はしない。

あと何回、あと何回・・・家族でも恋人でもない私はあと何回あなた
に会えるだろう。

客1 ごちそうさま。

女2 「お会計420円でございます」。

女6 お願いがあります。

客1 はい。

女6 あのドアをあなたが閉めたら、私たちはお別れです。そのあと私たち

はそれぞれ50年を生きる。50年間のうち、一度だけ、一度だけで

いいから、私の夢を見てください。特別でもなんでもない夜に、特別

でもなんでもない私の夢を。勿論、朝目覚めたならば忘れていて構い

ません。ただ、その約束があるだけで、私はあなたのいない50年間

を生きていける。気がする。・・・、なんちゃって。

女2 「580円のお返しでございます」。

客1 ありがとう。

女7 生まれてきてくれて、

女2 「ありがとうございました」。

客1、去る。

女4 「明日も、あなたに会いたい」0回。

女2 をめがけて空から泡が降り注ぐ。

女2 は泡にまみれて見えなくなる。

やがて泡は消え、女2がひとり残っている。

Hello Hello

鈴木梢

舞台をゆっくりスポットライトが照らす。女が一人。
間。（スポットライトは20秒毎に一つずつ増えてゆく）

女 ハロー、ハロー。聴こえていますか。

あの日、私は壊れました。

私の今言った「あの日」と、あなたが思う「あの日」は、多分一致して

います。これから先何十年、私たちにとつての「あの日」は多分、一つの意

味になるでしょう。

そっちはどうなっていますか。

こっちは多分もう何日かすると瓦礫の下に埋まった私の身体を誰かが見つ

けて私の身体は移送されてまた別の土の中に埋められるでしょう。そうな

ると思います。でもそこには仲間がいます。だからさみしくはないと思

います。お隣さんに挨拶をして、私はゆっくり、分解されて地球になつて

きます。そう考えると、結構それも素敵なののように思えます。

そういうえば、私は高校生の時犬を飼っていたのです。高校生の時とい

か、高校生の時まで。その犬は私よりだいぶん先に地中に潜ったので、これ

はずいぶん先輩になるかと今思いました。

会えるといいな。

そうか、これから私がどういう経路で地球の一部になつてゆくかは正直わ

からないのですが、考えようによつては私は先輩たちに会えるチケットを

手に入れたのかもしれない。おばあちゃんに黙っておじいちゃんにお先

に会えちゃうとしたら、なんかちよつと申し訳ないけどちよつと贅沢な気

も同時にします。

勿論、かなしさはあります。こっちもあつちも多分それは変わりません。

でも、私のかなしさよりも、私の祈りが届く方が、それはきつと素敵なこ

とだと思えますし、おんなじ時間をかけるのなら、前を向いた方が素敵で

幕

す。私にとつての前がどこになるのかは、今はもうわからないのです
が、こころの前は、多分こつちだと思えます。だから、

女を照らすスポットライトの直径が拡がつてゆく。
舞台が明るくなってゆく。

女 ハロー、ハロー。聴こえていますか。

私は大丈夫です。のんびり待っています。だから急がないで、どうか

あなたの速度を変えないで。私は元気です。今までも、これからも。

星が見えます。空がきれいです。目を閉じれば、ちゃんとそこにあり

ます。

ずっと、ずっとあります。

あなたの顔も、あなたとの日々も、あなたのこと、全部。

ちゃんとあるから。それはきつと、あなたの中にも。だから私たちは、

ずっと一緒にいられたし、これからもいられるんだね。

これは、発見です。世界を変える、大発見。

瓦礫の下でも、土の中でも、それはずっと、ちゃんとありました。

思いには重力がありません。だからきつと、瓦礫を越えて届くと思

ます。

だから、届け！ 思い。

客席も含めた空間全体が明るくなる。

女が大きく手を振る。お辞儀をする。

シェイクスピアが言ったという「人生は舞台」という言葉を最近になってよく思い返す。

最近は何となく演劇を観なくなった。時間がないという言い訳もできるのだろうが、そういう欲求がなくなってしまったのかも知れない。

ツイッターやフェイスブックといったソーシャルメディアの影響です。たとえば簡単だが、正確にはそうではない。

人々の生活が、かくも色鮮やかで笑いや悲哀、怒りに満ちているということ。私たちはツイッターのタイムラインに流れてゆく他人のリアルタイムな声、友人が共有するフェイスブックの話題で知ることができる。

「演劇」<<<<<越えられない壁<<<<<生活」

「人生は舞台」という言葉は、人々の生活そのものが舞台であり、他人から鑑賞されるドラマなのだということを示唆している。

だが、そのドラマは、演劇とは違う。演劇は生活にはなりえない。演劇が表現する世界は閉じた世界だ。我々が生活する世界とは異なり、世界の終わりを演者も観客も知っている。

生活はもはや閉じたコミュニティの中にはなくインターネットを通じて共有され、評価されるものとなった。それはいわばエンターテインメントなのだ。

私たちは、私たちが生活する「自らの死」以外に明確な終わりのない世界で、人々が発信するドラマを鑑賞することができる。そのような環境であって演劇をやることにはどのような意味を見出せばよいのだろうか。

この演劇と生活の越えられない壁は演劇それ自身が築き上げた「第3の壁」という名の壁だ。

演劇はいわば「劇場」という空間で世界と区切るという仕組みでできている。観客に鑑賞されるものであり、干渉されるものではないというのが演劇の仕組みだ。

あえて観客を舞台上げような演劇もあるだろうが、それも折り込み済みで世界を区切るというのが演劇の作用だ。

編集後記

今号のテーマは「境界線上のアート」でした。

表現、芸術には、国境がありません。言語の壁さえも越えてゆけます。

ただそれでも、アートの中にある境界線。

これは紛れもなく、作り手の中にある境界線です。

例えば今日、東京で、一体どれだけの劇団が公演を行っているでしょう。

ただそれは、乱暴な言い方をすれば、少し大きな部屋を借りて集団生活しているのとさほど変わりません。

彼らの多くは人々の多くに気づかれず、公演は終了し、打ち上げをし、各々の日常にまた戻ってゆきます。

そしてそれは、少し拡大した「自己」の中で完結してしまうのが常です。

その繰り返しの中、私たちは今、これをどう打破してゆけばいいのか。

この壁は、ある日突然歴史的に崩壊するのか。

そのような事は多分ありません。

だって、その壁を作ってしまったのは紛れもない作り手自身なのだから。

それを通説にしまいと今現在もがきながら表現を続けている彼らの言葉や作品が、いつか大きなうねりとなって多くの方に享受されることを祈って止みません。

そしてまた、本誌が、そのささやかなきつかけになりましたら幸いです。

編者

しかし、いみじくも劇場を壊したのは観客自身なのだ。ツールではなく、人の思考が変化した。求められている、面白い、共感してもらえものが変化している。それを可能にしているのがいわば技術であり、ツールのだ。

そのような時代に演劇ができることは何か。

私が考えているのはいわゆる「ラッシュモブ」のようなものだが、人々の生活の中に演劇が入っていくことなのではないだろうか。もはや劇場が観客によって壊されてしまったのなら、劇場から出て、生活の中に溶け込むこと、それが可能性として演劇には残されているように思う。

*Wikipedia ノラッシュモブ <http://bit.ly/gXm9N>

【事例】

The T-Mobile Dance - YouTube <http://www.youtube.com/watch?v=VQ3d3Kt9PQM>

Food Court Musical - YouTube <http://www.youtube.com/watch?v=dKYZ6nBPJ2M>

鈴木徹収

越えられない

著者紹介

阿部有希(あべ ゆうき)

「俺が一番」においては「OIRAN」に参加。

8月には鈴木梢作「Blue Parade」に出演。

ポエトリー・リーディングにも造詣が深い。

庭田悠甫(にわた ゆうすけ)

多数の「俺が一番」関連公演に関わる。

俳優としても強烈な個性を持ち、自主企画「恐竜企画」において作・演出も務める。

鈴木梢(すずき しょう)

作家。演劇集団「俺が一番」主宰。

その傍ら、個人創作ユニット「文相」活動を展開。

<http://bunsyojimdo.com/>

小野寺愛(おの であい)

1985年12月3日生。いて座。AB型。宮城県気仙沼市出身。

演劇ユニット「こまどりの会」脚本・演出担当。

「俺が一番」においては「夏の陣」に参加。

ごまどりの会Twitter: <https://twitter.com/tenakkaz>

鈴木徹収(すずきてつしゅう)

俳優・DJ・作家・デザイナー等、多方面で才能を発揮。

「俺が一番」においては「OIRAN」に参加。

寿々木総(じゅじゅき そう)

ライター。大学を卒業後、現職に就く。

その全ては謎に包まれている。